「心理学化」社会における社会と心理学／精神分析

片桐雅隆*・樫村愛子**

本稿の前半では、心理学化する社会論の前史として、社会学の歴史の中で、社会学と心理学／精神分析との関連を跡づけた。1.1の「創設期の社会学と心理学」では、創設期の社会学の方法の中で、心理学がどのような位置にあったかを明らかにする。1.2の「大衆社会論と心理学／精神分析との接点」では、媒介的な関係の解体による心理的な不安の成立が、社会学における心理学や精神分析の視点の導入の契機となったことを指摘する。1.3の「『心理学化』社会論の登場——戦後のアメリカ社会学」では、自己の構築の自己言及化という観点から、アメリカにおける心理学化社会のさまざまな動向を明らかにする。1.4の「ギデンズとベックの個人化論と自己論」では、高次近代や第2の近代における自己のあり方や、その論点と心理学社会論との差異などを指摘する。

後半では、第2の近代が始まり出す1970年代以降について、個人化の契機における社会（「社会的なもの」）の再編成の技術として心理学化を分析した。その起点は「68年」にあり、古い秩序を解体して新しい社会を構成しようとした「68年」イデオロギーが「資本主義の新しい精神」（ボルタンスキ、シアベロ）となって共同性を意図せず解体しネオリベリズムを生み出すものとなったこと、この社会の解体にあたって社会の再編技術として心理学／精神分析が利用されたことを見る。それはアメリカ社会で顕著であるとともに、アメリカ社会では建国の早い段階から心理学／精神分析が統治技術として導入され精神分析が変形された。日本においては、福祉国家化の遅れに連動する個人の自立の遅れのため、心理学化は周辺現象としてしか起こらず、90年代の個人化の契機は「欠如の個人主義」（カステル）のような過酷なたちで現れ、心理学化は十分構成されないままポスト心理学化へと移行している。

キーワード：個人化、心理学化、精神分析

* 千葉大学文学部教授 katagiri@L.chiba-u.ac.jp

** 愛知大学文学部教授 kashi@aichi-u.ac.jp

1 社会学と心理学／精神分析との接点 ——「心理学化」社会論・前史

本特集は、「心理学化」社会についてのさまざまな論考を収めると同時に、心理学化社会論についての交通整理をすることをめざしている。本節では、心理学化社会論の前史として、社会学の歴史の中で、社会学と心理学や精神分析との接点を、心理学化社会論との関連という限定された視点から論じよう。

1.1 創設期の社会学と心理学

近代の社会学の土台を築いた、É. デュルケーム、G. ジンメル、M. ウェーバーらは、心理学的な視点をどう見ていたのだろうか。デュルケームの方法が方法論的集合主義であり、ジンメルが方法論的關係主義、ウェーバーが方法論的個人主義であるとするなら、心理学的な視点ともしっかりと接点があるのは、ウェーバーの方法論的個人主義になるだろう。

ウェーバーは、行為者の動機を理解することに、社会学の方法論的な基点があると考えた。しかし、動機理解は、個人の「内的な動機」の理解を意味するものではないとウェーバーは言っている。

理解社会学は、諸現象をもっぱら「内側から」、それらの諸現象の生理的ないし心的な徴候を枚举することによって観察するのではない（Weber [1913] 1956: 430 [17] = 1978）。

では、「内側」からではない観察とはどのようなものだろうか。指摘すべき点は2つある。第1は、ウェーバーの言う動機理解は、目的合理的な動機という理念型を尺度とする概念的な理解だ、という点である。つまり、目的合理的行為の理念型を1つの尺度として、感情的な行為などの目的非合理的な行為の動機は、それとの偏差の中で測定される。そして第2は、動機理解が、個別的な個人の動機理解を意味するのではなく、集合的な人びとの類型的な動機の理解を意味することである。つまり、動機理解においては個々人の「心的な事実」が問題とされるのではなく、あくまで集合的で類型的な動機理解が問題とされるのである。こうして考えると、ウェーバーの方法論的個人主義は、行為の動機理解をめざしたものとしても、それぞれの「心的な事実」を担う個別的な個人の動機理解をめざしたものではない。

一方、方法論的關係主義に立つジンメルは、社会を、相互行為の産出の過程（＝社会化）としてとらえようとした。ジンメルは言う。

多くの人が相互行為に入るとき、そこに社会は存在する（Simmel [1908] 1923: 4 [15] = 1994）。

そして、個人は、社会と分離され、あるいはそれと独立してあるのではなく、相互行為の中の結節点に存立する。つまり、「個人は社会的な糸がたがいに結び合う場所にすぎず、人格とはこの結合の生じる特別な様式にすぎない」(Simmel [1908]1923: 2 [12] = 1994)。こうした相互行為は、「心的な状態や過程」の場として、他者に影響を与え、また他者から影響を受ける「心的な相互行為」としての特徴をもつ。しかし、社会学は、「心的な状態や過程」の内容を問う科学ではなく相互行為の形式を問う科学である、と言うジンメルは、かれの形式社会学の集大成である『社会学』の中で、上位と下位、闘争、秘密などの形式の詳細を検討する一方で、心理学を含めて、内容を分析する他の諸科学から、社会学を差異化している。

一方、方法論的集合主義の立場に立つデュルケームは、心理学的な視点にもっとも遠いところに位置するように思われる。しかし、意識や心理とデュルケームの方法が無縁なわけではない。集合意識は「社会の心理的類型」であり、また、それはあくまで個人の意識の中にある、とデュルケームは言う (Durkheim [1893]1960: 46 [80 1] = 1971)。それは、どのような意味だろうか。デュルケームは、個人に外在する〈もの〉としての社会のあり方を、集合意識の側面からとらえようとした。社会の成員に共通な信念や感情の総体としての集合意識は、固有な生命をもつ一定の体系を形成し、個人がおかれている個別的な要件からは推測されることはない。つまり、集合意識は、あくまで個人の意識の中に実現するものの、それは個人の意識には還元しえないがゆえに、個人意識とは区別された「社会の心理的類型」なのである。そのかぎりでは、デュルケームの社会学も個人の意識を扱う心理学とは区別される。

Z. バウマンは、デュルケーム、ジンメル、ウェーバーらの社会学の設立者たちに、「アイデンティティの問い」を向けても意味はないと言っている。なぜなら、彼らの社会学の問いの中には、アイデンティティ問題は含まれていなかったからである、と (Bauman 2004: 16 [42 3] = 2007)。そうしたバウマンの見方は、デュルケームらの時代は、まだ、アイデンティティを根拠づける「社会」を確認することができ、自己への再帰的な問いが今日ほど先鋭化していなかったことを示している。その指摘は、社会学と心理学や精神分析との接点を「心理学化」社会論との関連で問おうとするここでの視点にとっては重要である。しかし、もう1つ考慮すべきは以下の点である。つまり、デュルケームらが心理学的な視点を否定し、社会学をそれから差異化したことは、新興の科学としての社会学の固有性を心理学と区別するという課題を共通にかかえていた、という点である¹⁾。

1.2 大衆社会論と心理学／精神分析との接点

デュルケームらの社会学に対して、心理学や精神分析的な視点を社会学に取り入れたのは、ヨーロッパの社会学においては大衆社会論が初めてであると言える。K. マンハイムは、(社会)心理学的な視点の必要性を主張している。その理由は、「心理的・道徳的・文化的生活」が崩壊しつつある当時の状況の分析には、生産や分配

に焦点を当てる経済学的な視点では不十分であり、心理学的な視点が必要とされたからである。しかし、必要とされた心理学とは、社会的な視点をもつ心理学であった。なぜなら、マンハイムによれば、当時の心理学は、一方で、人間の行動の一般的な法則を実験的に探求する行動主義的な心理学か、内省に基づいて人間の心理を探る哲学的な心理学かのいずれかであって、それらは、当時の社会がかかえる、人びとの生きた心理的問題を解き明かせないからである。マンハイムの求めた、(社会)心理学的な視点とは、心理的な問題を、1人ひとりの人格(パーソナリティ)の問題に還元するのではなく、社会的な背景を探ることで、個人と社会の相互的な関係を探る科学であった(Mannheim 1940: 16 7 [18 20] =1962)。

では、マンハイムが考えた当時の心理的な問題とは何だったのだろうか。それは、媒介的關係(mediated relation)の解体によって、人びとの欲求や衝動が行き場を失うという事態であった。その説明の構図は、媒介的關係の解体→殻を失った無力な大衆の出現、という典型的な大衆社会の説明に対応している。そして、そうした殻を失った心理的な不安にふたたび水路づけをしたのが、全体主義国家による操作であった(Mannheim 1940: 61 [74] =1960)。つまり、マンハイムの時代において、人びとのアイデンティティの基盤としての媒介的關係が不安定化する中で、アイデンティティ問題が先鋭化し、そうした状況下で心理的な問題が社会学においても大きな課題として浮上したのである。

同じ時期に全体主義国家や大衆社会を論じたE.フロムは、よりつよく心理学や精神分析的な視点を社会の分析に取り入れた。それは、フロムが、S.フロイトの影響を強く受けた新フロイト派の社会心理学者だったから、当然と言えるかもしれない。フロムは、全体主義国家の分析に、マゾヒズムやサディズムという、フロイトに端を発する精神分析的用語をキーワードとして用いた。マゾヒズムは、自分に対して圧倒的に強いと感じる人や力に対して服従しようとする性向であり、サディズムは、他者を自分に従わせ、苦痛をあたえようとする性向である。この2つの性向は、「権威主義的性格(authoritarian personality)」の核であり、それは同時に「自由からの逃走」を説明するキーワードでもある(Fromm [1941] 1965: 163 [160] =1971)。

フロムの「自由からの逃走」論もマンハイムの大衆社会論と共通の視点に立っている。つまり、フロムにおいて、媒介的關係としての「第1次的絆」が希薄化することは、一方で自律や独立の精神を人びとにもたらすが、一方で、孤独や不安をもたらすことになる。そうした孤独や不安に対処するメカニズムがマゾヒズムやサディズムである。しかし、それらは、ともに他者と一体化することで孤独や不安から一時的に逃れるだけで、孤独や不安を克服するものではない。つまりは、そうした他者との一体化は自由からの逃走でしかないのである²⁾。

マンハイムにおける(社会)心理学的な視点の主張や、フロイトに影響を受けたフランクフルト学派のフロムらによる精神分析的用語の社会分析への導入は、大衆社会的状況の成立と切り離せない。つまり、人びとのアイデンティティの基盤とし

ての媒介的關係が希薄化し、そのためにアイデンティティの探求がより不安定化し、再帰化してきた状況と切り離すことはできないからである。逆に言えば、そうした状況が、心理学や精神分析的な視点の導入を社会学に迫ったのである。また、その点が、デュルケームらの創設期の社会学との差違と言えるだろう。

1.3 「心理学化」社会論の登場——戦後のアメリカ社会学

「心理学化社会 (psychologized sociology or psychological sociology)」という用語や議論が登場したのは戦後になってからである。1978年に出版された『心理学的社会 (The Psychological Society)』(Gross 1978)の中で、M. L. グロスは、「人間の問題を内的な心理的な不適応が生み出すと見る」傾向をもつ社会を心理学的社会と名づけている。しかし、社会学においていち早く心理学化社会を論じたのは、P. L. バーガーの1965年の論文だろう (Berger 1965)。

バーガーはその論文の中で、心理学化社会の背景を私化現象に求めている。つまり、現代社会では、産業領域や政治的な官僚制などの公的領域は、合理化、匿名化することで、人びとにとってのアイデンティティの枠組みとはならず、それらに代わって家族などからなる私的領域がその根拠となる現象を、私化現象は意味している。公的領域と私的領域の分断を媒介的關係の解体に求める点は、大衆社会論の構図と共通する。しかし、バーガーにおける私的領域への見方は大衆社会論のそれと必ずしも同じではない。なぜなら、私的領域は全体主義国家の直截的な支配の対象としてとらえられるのではなく、消費社会化の進展を背景とした親密性の空間と見なされているからである。

一方、公的な枠組みを失った、私的領域でのアイデンティティ探求は不安定なものだ、ともバーガーは指摘する。それは、「個人がもはや全体性において社会を知覚することができない」からである。そうした状況下においては、私的領域での人びとのアイデンティティ探求を手助けし、その不安定さをカバーする「アイデンティティのマーケティング機関 (identity marketing agencies)」が重要となる、とバーガーは指摘する (Berger 1965: 39)。その機関とは、伝統的なものとしては教会を意味するが、新たには、精神分析や心理カウンセリングなどのための諸施設を意味している。このように、私的領域で、心理学や精神分析の語彙や概念に依拠することで、アイデンティティ探求がなされる傾向が「心理学化社会 (psychological society)」と名づけられるのだが、バーガーの卓見は、私的領域の心理学化と同時に、公的領域も心理学化したことを指摘した点である。バーガーは次のように言う。

生産性という用語は、技術者の用語から心理学者の用語に移行したことは容易に見て取れる (Berger 1965: 40)。

その表現は、生産性が技術の問題ではなく、やる気やフラストレーションなどの心理的な問題として語られるようになった傾向を意味している。

心理学化社会とは何かについては大きく2つの見方がある。1つは、より一般的に、自己アイデンティティの構築の自己言及化を意味している。つまり、公的な領域の物語を含めたさまざまな大きな物語が、自己を位置づける枠組みとして希薄化し、その枠組みが、親密な関係性、あるいは「本当の自分」や「自己肯定観 (self esteem)」などの自己自身に言及する語彙に移行する現象を、心理学化社会は意味している。もう1つは、N. ローズに代表されるように、それを社会の「統治性 (governmentality)」に結びつけて論じる立場である (Rose 1990)。しかし、統治性という観点から見られた心理学化社会の現象も、さまざまな問題を、ストレスや鬱など、心や精神に関する問題に帰属して処理する傾向を意味しているので、そのかぎりでは、アイデンティティ構築の自己言及化の1つの傾向と言えるだろう。

第1の意味での心理学化社会は、バーガーが指摘した私化現象を背景とした社会に対応する。それは、バーガーの議論以外にもさまざまに論じられてきた。ここでは3つの傾向を指摘しておこう。第1は、1960年代の対抗文化に見られるようなスピリチュアリティの運動、第2は、シンボリック相互行為論における現代的な自己論の展開、そして、第3はナルシズムの自己論である。

第1の傾向は、ヨガなどの宗教、ドラッグ、トランスパーソナル心理学やセラピーなどによる精神世界の探求を意味している。第2の傾向は、R. H. ターナーの「衝動的なりアルセルフ論」に代表される。ターナーは、現代社会の自己の特徴を、「制度的なりアルセルフ」から「衝動的なりアルセルフ」への移行の中で示そうとした (Turner 1976)。それは、「本当の自分」が制度的な枠組みの中に位置づけられるのではなく、心や感性などの自己言及的な語彙に根拠づけられるようになった傾向を意味している。そして、第3のナルシズム論も心理学化社会論の典型と見なすことができる。なぜなら、その典型的な議論を展開したC. ラッシュによれば、ナルシズム的な自己も、アイデンティティの根拠となる「社会の理想」が解体し、個々人の欲望が枠づけられることなく肥大化する傾向を意味しているからである (Lasch 1979=1981)。たしかに心理学化社会の議論は、新自由主義的な傾向と親和的に語られることが多い。しかし、心理学化社会の傾向は決して最近に始まったものではない³⁾。

もう1つの心理学化社会論として、統治性の点から心理学化する社会を見る視点があった。その典型は、先述したようなローズの議論に求められる。この傾向も決して近年に固有なものではない。ローズ自身も指摘するように、問題を心や精神に帰属させることで解決していこうとする傾向は、1930年代の経営学における人間関係学派の見方に端を発している。そして、その指摘は、バーガーの指摘にも対応している。つまり、バーガーは、公的領域の生産性が心理学の用語で語られるようになった傾向を、心理学化社会の1つの特徴としていち早く指摘していたからである。こうして見ると、私的領域と公的領域の双方の領域の心理学化を指摘したバーガーの65年の論文は、その後の心理学化社会論の中身をほぼカバーしていた、と言えるだろう。

さらに、バーガーは心理学化社会という状況の定義がさらなる心理学化社会を構築していくとも指摘している (Berger 1965: 34)。たしかに心理学化社会の傾向は、マンハイムらの大衆社会論にその起源を求めることができるかもしれないが、その傾向が、「心理学化」社会と名前づけられることでより顕在化していったのが、戦後における、あるいは、より限定的には新自由主義化した時代における、心理学化社会の進展であると言えるだろう。

1.4 ギデンズとベックの個人化論と自己論

心理学化社会とは名前づけられないが、心理学や精神分析の概念を応用して現代社会を論じた議論として、ギデンズやベックの個人化論を忘れるわけにはいかない。心理学化社会論・前史の最後に、彼らの議論を取り上げよう。

ギデンズとベックは、現代社会を、「高度近代 (high modernity)」や「第2の近代」として特徴づけている。その傾向は、総じて言えば、「グローバリゼーション」や「リスク社会化」に求めることができるだろう。グローバリゼーションは、一般には、経済活動や情報の流れが国民国家の枠を超えていく傾向を意味しているが、ギデンズはその特徴を「現前と不在の交差、個別的な文脈から『遠く離れた』社会的な出来事の絡み合い (Giddens 1991: 21 2 [23 4] = 2005)」と規定する。つまり、グローバリゼーションとは、「時間と空間の分離」や「脱埋め込み」という過程のもとで、ローカルな社会を超えて、特定の場を共有しない人びとから構成される「普遍主義的な」社会へと移行するという、近代社会がかかえた移行の1つの極にある現象と考えられる。一方のリスク社会化は、社会的なものにしろ、個人的なものにしろ、出来事の予測不可能性を背景としている。リスク社会化をもたらした大きな要因の1つは、科学的な知識への懐疑である。科学的な知識は、近代社会においては、進歩という社会の物語を安定したものとして構築する重要な基盤であったが、現代社会では、環境問題に象徴されるように、科学的な知識が懐疑の対象となり、それ自体が再帰的に問い直される対象となった。

こうした現代社会の特徴を、ベックは、媒介的関係の希薄化という点から説明している。それが、第2の近代論である。第2の近代は、第1の近代と区別された現代社会の特徴を示している (Beck und Boss hrsg. 2001: 20 4)。デュルケムらの社会学の創設期に当たる第1の近代では、人びとは農村的な共同体から解放され、異質な人たちから構成される都市社会を形成したが、一方で、確固とした性別分業に基づく家族、都市での近隣関係、階級社会、国民国家などの「近代のゲマインシャフト」が残された。人びとはそれらの近代のゲマインシャフト、言い換えれば媒介的関係にアイデンティティの枠組みを求めることができたのに対して、第2の近代としての現代社会では、媒介的関係が解体し、個人化がより深く進行する。そうした第2の近代を強く推進したのが、ローカルな社会の原理を崩していったグローバリゼーションの趨勢である。また、人びとは直接的な所属を実感しうる媒介的関係に頼ることができないゆえに、第2の近代はリスクの個人化した社会でもある。

ローカルな関係を奪うグローバリゼーションやリスクの個人化は、自己の再帰性を高めていく。ギデンズは、現代社会に対応する自己のあり方を「再帰的自己」と呼び、ベックはそれを「準主体 (quasi subject)」と呼ぶ (Beck und Boss hrgs. 2001: 42 5)。それらの自己論で指摘されたことは、媒介的關係に支えられていた自己の自律性や一貫性という感覚が希薄化し、他者との関係の中で自己のあり方がつねに再帰的に問われていく、という事態である。とりわけ、自己の一貫性は自明の事態ではなくなったがゆえに、一貫性を確保するために、自己物語はつねに書き換えられなくてはならないことになる (Giddens 1991: 54 [59] = 2005)。

こうして見ると、ギデンズやベックの現代社会論や自己論においても、媒介的關係の希薄化によって、自己アイデンティティの構築が不安定化し、そうであるがゆえに、現代社会を語るために自己が焦点化されるという構図を読み取ることができる。しかし、ギデンズやベックの個人化論は、現代社会を語るうえで自己がキーワードとなると考えたが、その描く社会や自己像は、心理学化社会論と同じではない。なぜなら、ギデンズやベックの指摘する個人化は、新たな関係の形成を意味しているからである。そもそも個人化とは、社会の構成単位が個人により純化していく過程を意味しており、個人化した社会には、そうした個人がそれぞれの個別的な文脈を超えて、ネットワーク的に社会を構成していくという意味合いが含まれている。媒介的關係の希薄化は、心理学化社会論一般が示すような「社会」の縮小や解体をもたらすのではなく、媒介的關係に規定されない個人相互が関係を結ぶことを可能とさせるのである⁴⁾。

1.5 残されたテーマについて

社会学と心理学／精神分析との接点を、心理学化社会論との関連で概観してきた。しかし、社会学と心理学／精神分析との接点は、そうした現代社会論的な視点に限られない。本節の最後にその点に触れておこう。

P. マニングは『フロイトとアメリカ社会学』(Manning 2005)において、フロイトの精神分析学が、アメリカ社会学にどのように受け入れられ、影響を与えてきたかを詳細に論じている。パーソンズ社会学でのパーソナリティ・システム論や社会化論へのフロイトの影響は有名だが、マニングはそれとは別の流れとして、C. H. クーリーの鏡像的な自己論、H. ブルーマーや E. ゴフマンなどの相互行為論、近年の A. ホックシルトラの感情の社会学などのシンボリック相互行為論の系統の流れへのフロイトの影響を指摘している。ホックシルトラの感情の社会学も、心理学や精神分析の社会学への影響を見るうえで重要な分野である。その感情労働論は、労働上の社会問題が感情の問題として語られると考えた点では、心理学化社会論と密接に結びついているからである⁵⁾。

社会学と心理学／精神分析との全般的な接点に焦点を当てるのではなく、ここでは、その接点を、あくまで、心理学化社会論との関連でたどってきた。そして、心理学化社会論やポスト心理学化社会論などについての、より心理学／精神分析の側

から見た動向に関しては、次節の榎村論文にバトンを渡すことにしよう。

(1 節 片桐雅隆)

2 再帰的近代と「心理学化」——「社会的なもの」の構成にかかわる心理学／精神分析

これまで社会学と心理学／精神分析の関係について歴史的に俯瞰してきたが、ここからは現在、とりわけ再帰的近代（第2の近代）が始まる1970年代以降に焦点を当て、心理学／精神分析的認識や技術が生活世界を代替する社会技術として社会に浸透していく様相、「社会的なもの」（M. フーコー、R. カステル、J. ドンズロー）をになう様相として「心理学化」を見ていく。

2.1 個人化と心理学化

近代における宗教の没落と心理学の誕生、その後の精神分析（フロイト理論）の誕生（1900年）による、心理学への「無意識」⁶⁾の回収といった現象は、片桐も指摘したように、社会的言説や社会学に影響を与えてきた。片桐の述べるように、社会学は心理学との差別化の中で自らに輪郭を与え心理学を批判してきたが、精神分析（S. フロイト）登場後は、無意識についての理論によって記述される社会についての議論を社会学内部に取り込んできた。そしてまた近代社会の変容・解体および心理学の台頭と連動して起こる社会現象について、社会学は心理的なものについての言及を増加させてきた。とりわけ大衆社会と私化の浸透、中間集団の衰退やアノミーなどの社会の衰退と心理の台頭において、社会と心理の接点として「心理学化」は言及されてきた。しかしこれらの過程の中で「心理学化」がもっとも大きな問題となってきたのは再帰的近代（第2の近代）としての「個人化」が始まる1970年代以降である。再帰的近代（第2の近代）としての「個人化」において主体を支える生活世界や「社会的なもの」が解体し、心理学言説や技術がそれを本格的に代替しにない始めたからである。カステルは80年当時のフランス社会の「心理学化」を指摘すると同時に、生活世界の解体に対し心理学的認識や技術が生活世界を代替する必然性について述べている（Castel 1980）。またドンズローは、J. M. ケインズが無政府的な自由主義と独裁的な中央集権制との二者択一制を避ける方法を与え市場の一般的な調整に社会的なものを組み入れることができたように、精神分析は法律の領域（家族の特権性）と医学の領域（保健衛生における家族への介入）の間で適応の柔軟なメカニズムを提示したと指摘している（Donzelot 1977 = 1991: 274）。

2.2 「68年」を起点とする「心理学化」社会

「心理学化」の起点は「68年」のアメリカでの社会・文化運動に見ることができ、西海岸での新しい共同体構築の試みに心理学の技術が多く利用されたからであ

る。自己啓発セミナーや現代のネオリベ主体を生み出す技術の源流もそこに見出すことができる (Ehrenberg 2010)。

シンボルとしての 68 年現象とその時代を社会の転換点と見る議論は今日人文・社会科学で多く見られる⁷⁾。68 年の運動は社会的な改革を掲げ性革命やそれまでの社会と比較して規範からの相対的な自由を手にはしたものの、消費社会や私化が進行し、68 年の運動が掲げた社会変革の要素や共同的要素はむしろその後大きく衰退していった。それゆえ最近、仏などでは大統領サルコジによるあからさまな 68 年思想への攻撃も見られている。じっさいフランスでは、68 年世代の政治家たちが以後社会で活躍しネオリベ政策を進めた経緯があり、「68 年の施策」として一部批判されている。社会改革をめざしながら行きすぎた社会解体を進めてしまったとされる 68 年の運動のこの矛盾に対し、L. ボルトンスキと E. シアペロは、M. ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(以降プロ倫とする)の議論を参照し、68 年イデオロギーが意図せずネオリベリズムを加速したことを指摘した (Boltanski et Chiapello 1999)。プロ倫が宗教そのものを消去させることを目的としていたわけではないのに宗教の手段としての利益追求が正当化される道を作ることで結果として資本主義を推し進め宗教を解体したように、68 年イデオロギーも、新しい社会をめざしていたにもかかわらずそのための手段としての古い社会秩序の解体が社会の解体を極限的に進めることを促進したとするのである。こうして 68 年思想は「資本主義の『新しい』精神」だったと彼らは記述した。そして、ここでこのイデオロギー＝「新しい精神」は心理学的認識・技術が大きく支えたのであり、とりわけアメリカではそうであった (Boltanski et Chiapello 1999)。

ウェーバーの「プロ倫」＝「資本主義の精神」の論理は、精神分析におけるウィニコットの「移行空間」論と呼応している。移行空間とは子どもがいきなり母親から自立することは困難なので、枕やぼろきれのような母の代理物を支えとし、最終的にはそれもなしですませるようになるよう自立していく過程である。F. ジェイムソンや S. ジェックは、「消滅する媒介装置 (vanishing mediator)」としてこれを人文・社会科学的な議論に練り上げた。そして心理学技術は、退行や転移といった、対他者的な関係技術によりそれを人工的に使用することで、古い社会空間との切斷や別の社会空間との接合を促進するものとして、当時発見され利用されたのである (Jameson 1988: 31=1993; Žižek 1991: 185=1996: 308 9)⁸⁾。

それゆえ、「心理学化」という問題を考えるときにここで示唆される重要なことは、社会的なものが心理という個人的なものに還元されることが心理学化であるという単純な理解ではなく、心理学的認識や技術が社会的なもの(古くは宗教)の代理物となり、当該社会の社会的なものとの結合・分離を構成している(この意味で社会学の中核であった宗教社会学を心理学／精神分析の社会学は継承している)ことに着目する必要があるということである。そして竹中が示唆するように、社会学はこの点で、心理学的認識・技術を社会的なもの構成に関わるものとしてますます現在取り入れざるをえなくなっているのである(竹中 本誌 386 403)。じっさい、

近年の社会学理論は、主体論（A. ギデンズ、U. ベックらの再帰的個人化論）やそれを支える存在論的安定（ギデンズ）や承認（A. ホネット）といった概念を社会学に組み込んできている。またフロイト理論を洗練したJ. ラカンの議論が、ポスト構造主義、ポストコロニアル、フェミニズム、カルチュラル・スタディーズ等の理論に利用されるのと同様、ラカンの議論を参照した社会学理論も生み出されつつある。A. エリオットは、精神分析が、エージェントの分析に欠かせない分析枠組みであることを指摘している（Elliott 2004: 158）。

2.3 アメリカ社会と心理学化

68年の共同体再構築運動において心理学理論・技術が多く動員されたことを述べた。しかし遡れば、社会の構築という点で社会を支える資源としての伝統がなかったため、アメリカでは心理学理論・技術によって社会を再構築する過程がもっとも早く実験的なかたちで見られ、その後も世界に先駆けた社会現象を繰り広げてきた。伝統の弱いアメリカ社会では「心理学化」は早く、伝統の不在を代替するかのようになり、心理学／精神分析は社会構成技術として利用された⁹⁾。ユダヤフォビアによってヨーロッパでは敬遠・排除された精神分析はアメリカで開花し、そしてナチスの迫害から亡命したユダヤ人たちが心理学／精神分析の普及に貢献したこともそれを促進した。

アメリカ社会の構成に早くから心理学技術が導入された現象は、たとえば社会福祉の脱組織的、ネットワーク的、心理学的運動としてのアメリカのソーシャルワークの成立（心理と福祉・社会運動の結合）や、心理と軍事・教育の結合¹⁰⁾などで端的に観察される。ほかにさまざまな先駆的な現象や、ナルシズム論等社会現象やそれを記述する言説や社会学理論もアメリカでまず見られている。こうして心理学化についての片桐が指摘するようなあらゆる局面（自己言及化という第1の意味での3つの傾向、および統治という第2の意味での教育や産業における本格的な心理学化）は、アメリカで最初に出現している¹¹⁾。

しかし、アメリカでの心理学／精神分析の浸透の歴史を振り返ると、フロイトが「自我心理学」を批判したように（Freud 1914=1983: 296）、アメリカ心理学・精神分析は、フロイトの自我概念を変形し無意識と性の壊乱性を捨象したものであり、「精神分析のアメリカ化」の産物であった。「心理学化」は社会と心理の結合様態であるため、当該社会の固有性に影響を受けた独自の変化を遂げ、それゆえ学問の大衆化、俗流化という側面や、心理学／精神分析の学派の分裂や変形を伴う¹²⁾。

フロイト（さらにはラカン）が批判したように、フロイト理論はアメリカに導入されると、主体を壊乱するものである「無意識」の還元不能性は消去され、無意識が意識や理性に回収される心理学的イデオロギーとなった。こうして統治イデオロギーとなった変形版アメリカ心理学＝自我心理学に対し、68年の反体制運動の中でアメリカで生まれた「第三の心理学」は「無意識」（このコンテキストでは性や感情）の復権を主張した異議申し立てとして起こる。この意味では、自我を理性の

審級として無意識を抑圧しようとしたアメリカ化したフロイトに対し、「第三の心理学」による自我心理学批判は、無意識の壊乱の要素を評価するという点で、本人たちはフロイトに反抗しているつもりがフロイトに戻ろうとしたものでもあった。すなわち本人たちは、アメリカ化したフロイト理論をフロイト本来の理論と誤解してフロイト批判を行っていたつもりだったのである。とはいえそれは、結局やはりフロイトに戻るものではなく、今度は無意識＝感情的自己を中心に置き、やはり主体の分裂や葛藤の還元不能性を消去するものとなって、改訂版アメリカンイデオロギーとなる。精神分析は、科学的言説として、当該社会の「主人の言説」（社会の支配的イデオロギー、Lacan 1991: 31）を批判するものであるが、アメリカでは、自我心理学においても第三の心理学においても、精神分析的言説が「主人の言説」化せざるをえなかったため、主体を壊乱するものとしての無意識という審級は常に排除されたのである（Lacan 1974=1992: 161）。それゆえ 70 年代以降のアメリカ精神分析は、主体を壊乱するものとして無意識（性や感情）があるのではなく、性、感情等を快楽として無条件に肯定する、ベラーが批判するような私化主義的・快楽主義的なものとなっていく。

2.4 日本社会における心理学化

ベックは近年、方法論的コスモポリタニズムの観点から、「複数の近代」と、「個人化」の多様性と差異に言及している（Beck 2006）。ベックは心理学化にはあまり言及していないが、個人化、心理学化とも社会の解体に伴う、新しい社会の再構成に関わる現象であるとすれば、両者は密接に関係するだろう¹³⁾。アメリカ社会における早い心理学化に見られるように、各国の心理学の導入や受容の系譜をたどることで、当該社会の「社会的なもの」の様相を探ることができる¹⁴⁾。

欧米の個人化を振り返ると、欧米では第 1 の近代における個人主義化は、戦後の経済成長／福祉国家のもとで中間集団から個人が引き離され「社会的なもの」（当時は、福祉国家）と、中間集団から自立した個人とのカップリングの中で安定していた。が 1970 年代に入り成長が止まって福祉国家が揺らぎ始めると、それに代わる「社会的なもの」の模索が始まり「個人化」が起こる。グローバリゼーション、性革命、消費文化、ポストモダン化等々の背景のもとで、個人は快楽や感情を重視する（Castel 2003）。伝統的さらには象徴的なものが揺らぐとともに、個人は従来の生活世界の解体の中で生活世界を再構築し、新しい共同性を人工的に構成するものとして心理学／精神分析的言説や技術が利用されるようになった。

これに対し日本では、福祉国家のスタートが遅れ、1973 年福祉元年でやっとスタートしたのだが、スタートとともに財政的困難のため日本型福祉国家を形成して福祉国家化は十分に果たされず、企業と家族（開発主義と日本型福祉）に包摂される個人を再度構成することとなり、個人の中間集団からの解放や自立は遅れる。さらにその後 80 年代の経済繁栄を見たため、開発主義国家と個人のカップリングは（不幸にも？）継続した（Suzuki et al. 2010）。ヨーロッパで見られたような、福祉

国家の危機が心理学化による新しい社会編成を構成していくような個人化の契機は出現しなかった。そして、日本的受け皿からこぼれ落ちた周辺においてのみ心理学化は宗教現象として見られた。もちろん日本でも、戦後民主主義の中で限定的だが個人主義化は進んで、消費社会化、ポストモダン化、文化的階級の無化、家族の解体、性革命等々が進行し、片桐のいう第1の意味での自己言及化の心理学化のうちの、第2の快楽志向や第3の私化・ナルシズム的傾向と呼応するような社会変化も見られた。が、とはいえ心理学が安定的に普及する（西洋モデルとして心理学化の）前提となる個人主義の確立や古い共同性の解体は進まず、社会の中心において心理学言説や実践と結びつくものとはならなかった。片桐の指摘する第1の意味での第1の傾向、スピリチュアルムーブメントにおいても、伝統的要素との親和性のあるユング派などの言説は参照されたが、相対的に心理学の要素は希薄であった。第2の心理学化の意味としての統治的側面については、日本的な企業組織、学校教育組織において、社会技術として心理学技術が導入されるのは遅れた。

しかし1990年代（後半）には日本型福祉国家を担った企業と家族は解体し、小泉政権に象徴される構造改革が進み、そのもとで廃棄される生「欠如の個人主義」＝「負の個人主義」（Castel 2003）の状態に個人が置かれる（Suzuki et al. 2010）。そこでもなお社会再編成は進まず、心理学技術は即座に導入されるよりは人びとのアイデンティティ不安を補償するものとして「心理学化」が起り、心理学言説が消費された。このように心理学化は、とりわけ伝統社会から排除された場合、救済宗教や象徴的言説が過少な日本において、周辺現象、宗教現象として起り、ここでの心理学化の指摘は、宗教学者・宗教社会学者が早くから行っていた（島蘭 1996）¹⁵⁾。

その後、1990年代以降は、心理学的言説・技術は一般的な広がりをもち始め、社会の危機の中で社会技術としても徐々に導入されていく。1995年導入されたスクールカウンセリング制度に見られるように、不登校、ひきこもりに対処する専門エージェントとして（1988年の臨床心理士の資格化とセットで）、また虐待やDVなど家族の解体とそこから押し出される個人の救済において、カウンセリングは社会的な技術となってきた。企業への導入についても、大規模なリストラの補完物として産業カウンセリングが拡大した（2001年より技能審査から除外され民間資格化）。こうして、日本における心理学化は個人主義的な支えが全般に弱く、心理学は哲学や文学の衰退によりそれらの代理として欲望されつつも、言説や技術の定着を見ないままポスト心理学化へ移行しやすい条件をもっていた¹⁶⁾。

2.5 社会編成の理論・技術としての心理学／精神分析

心理学／精神分析が社会的なものの編成に関わってきたことを見てきた。ギデンズが指摘するように、心理学／精神分析はすでに社会の内部に再帰的技術として深く組み込まれている。そして教育・労働・家庭に介入する臨床権力は、生活世界を解体するものでもあるが、日本のような権威主義的・抑圧的社会体制が残存する社

会では、それに対する個人の抵抗空間を構成する要素にもなりうる諸刃の剣でもある。

また社会の流動化に伴って公私の領域が崩れ、従来では囲いこまれていた私的領域で満たされていた愛情要求が承認要求と相まって、親密圏（感情公共圏）で満たされようとする。流動化した社会＝ネオリベ社会で人びとが「普遍化された競争」関係に入ると、人びとの関係や交流を可能にする空間や関係を支えるものが重要となる。アレントが私的な領域の肥大化として恐れた「社会的なもの」の拡大は、現在では私的なもの／公的なものの両方を通底＝補完するものとして構想されている。臨床教育学や感情公共圏の議論では、このような空間での心理学／精神分析の認識や技術の埋め込みが、批判とともに必要なものとしても議論されている（檜村 2009）。

D. メールは、フランス社会で精神分析が寝椅子からメディアに舞台を移して社会に登場している（フランスでは、社会の心理学化がメディアへと大きく拡大展開している¹⁷⁾）ことについて、現代社会において心理的なものが生活世界を代替してメディアやネットワーク機能をもつことを一定評価している（Mehl 2003: 381）。その理由は以下のとおりである。第1に、集团的規範は融解し他から人生のレフェランスを調達してくる必要が出てくる。第2に、個人の人生は集団に帰する可能性をもつ。A. エーレンベルグが言うように、「不確かな個人」は「自分自身の人生のアントレプレナー」となり、他の人びとにとっての人生を示唆するものとなる（Ehrenberg 1996）。第3に、制度的な言説の相対化・周辺化は、多様性や独自性において人生の経験を価値づけることとなる。そして主観性は、集団性においてともに生きる条件となる（Dubet 1994）。第4に、私的な境界と公共的な境界の差異は失われる。第5に、個人的経験が公共的な規範等の変更の議論に影響を与える。

2.6 ポスト心理学化社会へ

一方、ネオリベ社会＝環境管理型社会への変容の中で、規律＝教育＝主体化は捨てられ、管理による統治の中で、心理学／精神分析も薬理学・認知・生物学による（＝ポスト心理学化的）統治へと代わりつつある。とりわけ日本では、心理学化は最初からポスト心理学化的要素を強くもっていた。日本では宗教的、哲学的なものはタブー視され排除される傾向があり、敗戦後はさらに、外傷化されることで排除された¹⁸⁾。新新宗教は心より超能力を重視し、現在のスピリチュアリティ・ブームも、快楽・感情重視の傾向にある。日本においては心理学化の内実である心理学のブーム自体、即効性への期待をもつものであり、ポスト心理学化の傾向をもっていた。富士登山ブームに見られるように、現在、心理学よりも物語として強力で即効性を伴う神話性をもつ伝統（ローカル）とスピリチュアルの結合が多く見られる。またアテンションエコノミー（Citton 2010; 檜村 2010）、認知資本主義において、心理学は、認知情動を生物学的に扱う方向へとより進んでいる¹⁹⁾。以上のように、心理学化は、再帰的近代（第2の近代）という社会変容と大きく結びついて社会の

構成の一部となるとともに、現在ではポスト心理学化への変容の中でその特性を変化させつつある。日本の心理学化は、最初からポスト心理学化的要素を強くもちつつ、現在も「心理学ブーム」の中で、その変容途上にある。

(2 節 樫村愛子)

[注]

- 1) W. プントらの実験的な心理学が産声を上げた時代において、彼らが心理学をどのように考えていたかは、今日とは異なっていると考えるのが妥当だろう。
- 2) 精神分析的用語に基づく権威主義的性格論は、フロムと同じくフランクフルト学派に属した T. W. アドルノらによっても展開されている。
- 3) 日本での心理学化社会論の1つの傾向として、自己アイデンティティの構築が自己言及化したり、親密な他者との関係に限定されたりすることで、病理的な傾向を生むという指摘が見られる。また、その点が、欧米での心理学化社会論との差としても論じられてきた。しかし、ここでは、そうした単純な差異化は必ずしも妥当しないとだけ指摘しておく。
- 4) ギデンズは「個人化」という用語を多用していないが、内容的にはベックの個人化論と共通しているので、ギデンズの議論も個人化論としてくった。また、バウマンの個人化論は、ギデンズやベックのそれより心理学化社会論と近いと言えるが、ここではその検討は省略した。なお、それらを含めて本節の内容より詳しい論点は、片桐 (2011) を参照のこと。
- 5) 感情の社会学 一般は、必ずしもそうした視点に限定されない。その点については、片桐 (2000: ch.4) を参照のこと。
- 6) 当時は、精神分析が「超心理学 メタ心理学」と称して、無意識を認めていなかった心理学との違いを主張し批判した。その後心理学は、無意識とそれを論じる精神分析を自らの中に回収する。しかし、無意識を排除した古典的な心理学と、無意識を包含した臨床心理学 (カウンセリング) が、今も心理学の中で矛盾的に同居する状態が続いている。
- 7) 運動の挫折の外傷を抱えた当事者たちも現在多く発言するようになり、1968 年の歴史的検証が隆盛している。
- 8) 自己啓発セミナーは、1968 年を源流とし、当時の共同性をベースにして (移行空間として)、共同体から断ち切った強迫的自己を生み出す技術として構成され、ネオリベリズムの中で利用されている (樫村 1998)。
- 9) J. デューイは、「哲学的方法としての心理学」(Dewey [1886] 1975) の中で、プラグマティズムの観点から、心理学をデモクラシーの道具とする考えを述べている。
また下河辺美智子は、アメリカの国家創立 (独立宣言) が「すべての人間は平等に創られている」(下河辺 2000: 268-70, 302-7) というレトリックを「自明」であると正当化する自己言及的構造によって支えられていると述べる。この言語遂行的行為の言語と行為のずれ (無意識) は隠蔽／排除され、想像化する。さらに現在では、科学という〈父〉の言語 - DSM に従い、完全なる象徴界を作り出そうとしていると指摘する。
- 10) 下司晶は、アメリカにおけるハルトマンの自我心理学と教育の結合を指摘する。また、教育と精神分析の結合の原理的困難と結合における精神分析の変形を問題化し指摘する (下司 2008)。
- 11) また、日本における心理学化の浸透は、戦後のアメリカの影響のもとで加速された (小谷野 1996)。ただし、心理学と教育・産業・軍事の結合は、知能検査・適性検査への心理学の適用

など、戦前（1910年代～）にすでに始まっていた（牧野 2007）。

- 12) A. エーレンベルグは、ドンズローの「社会を作る2つの方式（アメリカ流とフランス流）」を参照しながら、一方の極、すなわち「道徳的個人主義からパーソナリティへと移行するアメリカの自我心理学およびネオリベリズム」と、他方の極、すなわち「ラカン派が強く社会学的、メタ認知的なフランスの精神分析と共和政とアンチリベリズム」という、対極の心理／精神分析と社会の関係、社会の様態について考察している（Ehrenberg 2010）。

なお、当時のアメリカ社会に対するフロイトの分析（批判）については、P. ゲイ参照（Gay 1988 2004: 650）。

方、妙木浩之の指摘するように、「新規的なものに親和性の高い」アメリカでは、精神分析が精神医学におけるエスタブリッシュメントとなり、多くの優秀な人材を呼び入れ、「バブル化」した。そのため、非医師を排除するなど制度化による抑圧を生み、また制度化されたゆえに、時間と金のかかるコスト体質が問題となる。80年代以降の精神分析の「衰退」はこの点で「バブルの正常化」であり、精神医学における自我心理学批判（あとでみる臨床心理学における自我心理学批判と精神医学における自我心理学批判は、この点で親和性と拮抗をはらんでいた）は、優秀な人材による内在的批判としてなされたとする（妙木 2010）。パーソンズの精神分析との関係はこの文脈で解釈することが必要だろう（周藤 2002 も参照）。

- 13) ベックは、近年方法論的コスモポリタニズムによる個人化の多様性に着目しアジア社会の個人化を分析している。2010年の初来日シンポジウムの講演では、欧米の個人化の前提となるヒューマニズムを脱構築するため、デュルケムの人格崇拜に依拠して個人化を議論した。森（2000）や山田陽子（2007）ら日本の社会学者が心理学化を説明するときにやはり人格崇拜に依拠する点と呼応している。
- 14) この意味で、佐藤雅浩（2005a）が指摘するように、「心理学化」議論を最近の議論においてのみ見るのではなく、佐藤、牧野（2007）、近森高明（1999）らが行っているように、広く歴史的に日本の近代社会における心理学化現象を分析することで日本近代社会の社会的なものの系譜を分析することが重要だろう。精神分析や臨床心理学・精神医学の日本近代精神医療史研究はそれぞれで近年隆盛しており、これらを横断的に分析する社会学研究が望まれる。

その端として例えば、近森（1999）は日本近代における「時代の病」を考察し、〈大正・昭和期の脳神経の「過労」・文明病としての「神経衰弱」〉から、〈1950年代の精神的葛藤・人間関係の病としての「ノイローゼ」〉への変容を分析している。佐藤（2005b）は、さらに1970年以降、「ノイローゼ言説」に代わって心的葛藤が消失した「心身相関言説」が登場していることに着目する。

フロイトは、「神経の病」を心理学化して精神分析を創始したが、1980年のDSM-Ⅲへの改訂以降は、エーレンベルグ（1998）の指摘するように、（佐藤の指摘する）「心的葛藤の消失」はさらに進行し、「うつ」の時代へと社会は変容している（ポスト心理学化）。詳しくは樫村（2011）参照。

- 15) 樫村（2003）では、心理学化する宗教現象（「ニューエイジ」）の中の個人（多くは女性）が、社会的周辺に追いやられていた人びとであり、ニューエイジに出会う前には自らを言及する社会的言説がないまま、身体疾患や精神疾患を患っていた様態を調査において観察している。
- 16) 下山（2010）は、日本における異常行動（狂気）は「気」という主客未分化、自他未分化な概念を中心に記述されてきたとし、臨床心理学が根づきにくかった背景を指摘している。そして、大正期の知能検査の隆盛に見られる教育実験学と変態心理学（異常心理学）の2つが隆盛するが、東京大学の福来友吉の念写事件を契機に、後者はとりわけアカデミズムから撤退した

とする。また、心理療法は、古澤平作や森田正馬らのように日本文化・伝統との親和性をめざす試みが昭和初期に行われた。「自我や個人主義という地盤が弱いところに、……国家資格という高層建築を建てようとする試み」(下山 2010: 251)は、1969年の日本臨床心理学会の(資格化をめぐる)学会紛争という混乱と学会の解体となって現れている。そして日本の伝統と親和性のあったユング派・河合隼雄を中心とした日本心理臨床学会が資格・制度問題を継承していくこととなる。

- 17) フランスでの精神分析のメディア化の先鞭となったのは、1976年F.ドルトのラジオ番組(『子どもが生まれるとき』)が始まったときである。この番組はフランス社会で爆発的なヒットとなり、現在テレビ番組に精神分析家が登場する先鞭となった。
- 18) J.エイブルは、情動・欲望としての「クール」概念と、隔離の形式としての歴史的な「クール」の2つの概念において、クールとされる現代の日本文化を分析する(Able 2010: 157)。そして、アメリカと日本における未知なもの、新しいものへのフェティシズムは、どちらも歴史の忘却とコンテクストの欠如に基づいており、またアメリカにとって日本がクールであるのは、アメリカ文化が戦後日本に及ぼした影響をアメリカが無視できるからであると述べている。
- 19) 方では、外傷化されて排除された症候はサブカルチャーの中でアニメやマンガにおける戦争の多出やセカイ系での心理学化などで表現されている。この点では、カノンカルチャーの哲学等の不振が心理学によって代替されやすかったと思われる(櫻村 2007)。

[文献]

- Able, Jonathan, 2010, 「クール・ジャパノロジーの不可能性と可能性」東浩紀編『日本的想像力の未来』日本放送出版協会, 135-60.
- Bauman, Z., 2004, *Identity*, Cambridge: Polity. (2007, 伊藤茂訳『アイデンティティ』日本経済評論社.)
- Beck, U. 2006, *Cosmopolitan Vision*, Cambridge: Polity.
- Beck, U. und W. Boss hrsg., 2001, *Die Modernisierung der Moderne*, Frankfurt: Suhrkamp.
- Berger, P. L., 1965, "Toward a Sociological Understanding of Psychoanalysis," *Social Research*, 32: 26-41.
- Boltanski, Luc et Ève Chiapello, 1999, *Le Nouvel esprit du capitalisme*, Paris: Gallimard.
- Castel, Robert, 1980, "Le phénomène "psy" et le société française," *Débat*, juin-août.
- Castel, Robert et, Jean-François Le Cerf 2003, *L'insécurité sociale*, Paris: Seuil. (2009, 庭田茂吉ほか訳『社会の安全と不安全』萌書房.)
- 近森高明, 1999, 「2つの『時代病』——神経衰弱とノイローゼの流行にみる人間観の変容」『京都社会学年報』7: 193-208.
- Citton, Yves, 2010, *L'avenir des humanités*, Paris: Découverte.
- Dewey, John, [1886]1975, *Psychology as Philosophic Method, The Early Works of John Dewey, Vol. 1 1882-1898*, Southern Illinois University Press.
- Donzelot, Jacques, 1977, *La police des familles*, Paris: Minuit. (1991, 宇波彰訳『家族に介入する社会』新曜社.)
- Dubet, François, 1994, *Sociologie de l'expérience*, Paris: Seuil.
- Durkheim, É., [1893]1960, *De la division du travail social*, Paris: Presses Universitaires de France. (1971, 田原音和訳『社会分業論』青木書店.)
- Ehrenberg, Alain, 1996, *L'individu incertain*, Paris: Odile Jacob.

- , 1998, *La Fatigue d'être soi: dépression et société*, Paris: Odile Jacob.
- , 2010, *La société du malaise*, Paris: Odile Jacob.
- Elliott, Anthony, 2004, *Social Theory Since Freud*, Abingdon: Routledge.
- Freud, Sigmund, 1914, *Zur Geschichte der psychoanalytischen Bewegung*, Leipzig: Internationaler Psychoanalytischer. (1983, 野田倬訳「精神分析運動史」『フロイト著作集』10, 人文書院: 255-310.)
- Fromm, E. H., [1941]1965, *Escape from Freedom*, New York: Avon. (1971, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社.)
- Gay, Peter, 1988, *Freud: A Life for Our Time*, New York/London: Norton. (2004, 鈴木晶訳『フロイト 2』みすず書房.)
- 下司晶, 2008, 「フロイトからフロイト主義へ」『近代教育フォーラム』17: 47-61.
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity*, Cambridge: Polity. (2005, 秋吉美都ほか訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.)
- Gross, M. L., 1978, *The Psychological Society*, New York: Random House.
- Jameson, Fredric, 1988, *The Ideologies of Theory. Essays 1971-1986, Vol. 1-Situations of Theory*, Minneapolis: University of Minnesota Press. (1993, 鈴木聡・後藤和彦・篠崎実訳『のちに生まれる者へ』紀伊國屋書店.)
- 樫村愛子, 1998, 「自己啓発セミナーの困難」『現代思想』26(8): 214-26.
- , 2003, 「グローバリゼーションとニューエイジ」『「心理学化する社会」の臨床社会学』世織書房, 297-316.
- , 2007, 『ネオリベラリズムの精神分析』光文社新書.
- , 2009, 「フィンランドモデルを超えるために」『臨床社会学ならこう考える』青土社, 260-85.
- , 2010, 「『もしドラ』のストーリーテリングとマネジメントの社会学／精神分析学」『現代思想』38(10): 198-215.
- , 2011, 「ネオリベ社会におけるうつ——『自分であること（軽躁）への疲れ』とマゾヒズム幻想」『現代思想』39(2): 190-204.
- 片桐雅隆, 2000, 『自己と「語り」の社会学』世界思想社.
- , 2011, 『自己の発見——社会学史のフロンティア』世界思想社.
- 小谷野邦子, 1996, 「心理学主義の認識——戦後日本におけるアメリカ心理学との出会いの中で」『茨城キリスト教大学紀要』30: 1-13.
- Lacan, Jacques, 1974, *Télévision*, Paris: Seuil. (1992, 藤田博史・片山文保訳『テレビジョン』青土社.)
- , 1991, *Le séminaire XVII*, Paris: Seuil.
- Lasch, C., 1979, *The Culture of Narcissism*, New York: W. W. Norton. (1981, 石川弘義訳『ナルシズムの時代』ナツメ社.)
- 牧野智和, 2007, 「社会的実践としての心理学——日本心理学史の先行研究にみる」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 14(2): 189-201.
- Mannheim, K., 1940, *Man and Society in an Age of Reconstruction*, London: Kegan Paul. (1962, 福武直訳『変革期における人間と社会』みすず書房.)
- Manning P., 2005, *Freud & American Sociology*, Cambridge: Polity.
- Mehl, Dominique, 2003, *La bonne parole*, Paris: Martinière.

- 森真, 2000, 『自己コントロールの檻』講談社選書メチエ.
- 妙木浩之, 2010, 「自我心理学——米国精神分析の歴史的展望」妙木浩之編『自我心理学の新展開』ぎょうせい, 6-32.
- Rose, N., 1990, *Governing the Soul*, New York: Routledge.
- 佐藤雅浩, 2005a, 「『心理学化する社会』の歴史的相対性——大衆化された心理学言説に対する専門家の懐疑論に着目して」『現代社会理論研究』15: 383-93.
- , 2005b, 「心理学的疾患言説における精神／身体／外部環境——20世紀日本の大衆メディア言説を対象として」『ソシオロギス』29: 90-109.
- 島蘭進, 1996, 『精神世界のゆくえ——現代世界と新霊性運動』東京堂出版.
- 下河辺美智子, 2000, 『歴史とトラウマ』作品社.
- 下山晴彦, 2010, 『これからの臨床心理学』東京大学出版会.
- Simmel, G., [1908] 1923, *Soziologie*, München: Duncker & Humblot. (1994, 居安正訳『社会学』上, 白水社.)
- 周藤真也, 2002, 「社会システム論の誕生——パーソンズと精神分析」『社会学ジャーナル』27: 41-53.
- Suzuki, Munenori, Midori Ito, Mitsunori Ishida, Norihiro Nihei and Masao Maruyama, 2010, "Individualizing Japan: Searching for Its Origin in First Modernity," *The British Journal of Sociology*, 61 (3): 513-8.
- Turner, R. H., 1976, "The Real Self," *American Journal of Sociology*, 81 (5): 989-1016.
- 山田陽子, 2007, 『「心」をめぐる知のグローバル化と自律的個人像——「心」の聖化とマネジメント』学文社.
- Weber, M., [1913] 1956, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J.C.B.Mohr. (1978, 林道義訳『理解社会学のカテゴリー』岩波書店.)
- Žižek, Slavoj, 1991, *For They Know Not What They Do: Enjoyment as a Political Factor*, London/New York: Verso. (1996, 鈴木 策訳『為すところを知らざればなり——政治的要素としての享楽』みすず書房.)

Society, Psychology, and Psychoanalysis in a “Psychologized” Society

KATAGIRI, Masataka; KASHIMURA, Aiko

Chiba University, Aichi University

katagiri@L.chiba-u.ac.jp, kashi@aichi-u.ac.jp

In the first half of this paper, we trace the relation of sociology, psychology, and psychoanalysis in the history of sociology. In the first section, the position of psychology among the works of sociologists of early times is elucidated. In the second section, we show that the psychological uneasiness that arose due to the collapse of mediated relation introduced the viewpoints of psychology and psychoanalysis into sociology. In the third section, various trends of psychologized societies in the post war United States are explained from the viewpoint of the self reference of self construction. In addition, in the fourth section, we discuss the self, as described by Giddens and Beck, and the difference between their viewpoints and those of theories on psychologized society.

In the second half of this paper, we first analyze psychologization as the knowledge and technique through which we rebuilt the society (the social) when individualization began. We show that it began in 1968 and that the ideology in 1968 has become “the spirit of new capitalism” (Boltanski and Chiapello). Second, we describe how, due to the lack of tradition, psychologization initially spread in the United States as a resource for building a new society. Third, we point out that in Japan, psychologization has occurred only in marginal domains such as religion and sub culture because a welfare state has not been constructed satisfactorily in Japan and individual independence has not been fully supported.

Key words: individualization, psychologization, psychoanalysis